

## アジアの「叙景の悲劇」を凝視する人

高炯烈詩集『アジア詩行——今朝は、ウラジオストクで』

1

日本人は、果たしてこれまで朝鮮半島・中国などアジアの民衆を等身大で直視したことがあっただろうか。距離的には近いが、なぜかアジアは遠い国々で、関わりを持ちたくない消極的な態度を取ってきたのではないか。アジア太平洋戦争（十五年戦争）から六十五年、日韓併合から一〇〇年の歴史が過ぎてても、日本人にとってアジアはどこか他人ごとのような希薄な感じがしている。その根本的な要因は、日本が極東の島国であり、アジアからの影響が目に見えるような形で知らされないことがあげられる。しかし日本は多くのアジアからの文化・文明の吹き溜まりのような場所、日本の固有性とは、シルクロード経由でもたらされた多様なもの、例えば中近東・インド・中国・朝鮮・東南アジア・モンゴル・ロシアを含めた世界の文化・文明がアジアの国々を通してもたらされたものを日本が再構築して発展させてきたものである。冷静に考えるのなら、アジアの多様性や混沌は、日本人の暮らしや考え方の根底を形成している母胎のような存在である。明治維新後に欧米列強に劣等感を抱いた日本政府は、アジアの深

淵やアジアへの敬意を忘れてしまい、近代化が遅れていたアジアの国々や民衆を蔑視し、その結果として植民地化を謀り、戦渦に巻き込み大きな悲劇を生んでしまった。その日本人達が戦争に負けた根本的な理由は、六十五年が経ったからこそ、決して忘れてはならないことで、アジアを直視できなかった原因を問い続けなければならないだろう。日本人は忘却しやすい国民だが、これこそが日本人の最大の弱点であることに自覚的ではない。一例を挙げれば、大戦後の朝鮮戦争やベトナム戦争の需要が日本の経済成長に寄与したことなども忘れてしまい、日本人の勤勉性が経済成長をもたらしたという側面だけを強調しすぎることなども、アメリカに引き摺られた戦後の歴史の光と影さえも重層的に認識されてはいないのではないか。

高炯烈さんは、二〇〇六年八月六日に『長詩 リトルボーイ』（韓成禮訳）をコールサック社から刊行した。一九九九年から七年間も連載してきた約八〇〇〇行もの長詩を一冊にまとめた詩集だ。原爆は日本人だけが被害を被ったのではない。例えば広島では少なくとも朝鮮半島の人々が五万人前後、被爆したと言われている。その内の三万人は死亡し、二万人が生き残り、一万五千人が韓国の陝川ハナナヨなどに帰国したと言われている。高さんはその陝川の被爆者に取材し、この『長詩 リトルボーイ』を一九八〇年半ば以降に七年もかけて書き上げて一九九五年に韓国で刊行した。私はこの詩集のことを

韓国の詩人韓成禮さんから教えて貰い、強い関心を抱いていた。そして「コールサック」誌上で日本人に紹介したいと願った。二〇〇六年八月五日に『長詩 リトルボーイ』の出版記念会を広島で開催した。多くの日本の詩人たちが広島に集まってくれて、シンポジウムの中の高さんのスピーチに耳を傾けてくれた。広島周辺で二泊をした際に、今後も「コールサック」誌上で定期的に詩を書いてもらうことをお願いした。高さんは、アジアの詩人たちを紹介する「詩評」という詩誌を二〇〇〇年から編集していて、アジアの国々に旅行することも多いという。そこで「アジア詩行」という連作を試みたいと私に語ってくれた。幸いに広島での通訳を在日二世の李美子さんがしてくれたこともあり、李さんにその通訳をして貰えることになった。それから四年が過ぎ、詩篇が終結したこともあり、私はコールサック社で『長詩 リトルボーイ』と同じように企画出版することにした。

実は高さんの『長詩 リトルボーイ』を刊行することは、私にとって詩誌「コールサック」を株式会社コールサック社にさせる原動力になった記念すべき本なのだ。なぜなら私の中で『原爆詩集』を編集する構想が一九九七年に浜田知章さんと広島に行った時から芽生えて、いつか必ず実現したいと考えていた。しかしその前に高さんの『長詩 リトルボーイ』を企画出版しなければならぬと思うようになっていた。そして二〇〇六年に韓成禮さんも残り最後の翻訳を急いでくれ

日本の詩人たちの多くの支援もあり刊行を決意したのだった。信じられないことだが、約四〇〇冊も日本の詩人たちや韓国・朝鮮の関係者達が購入してくれたのだった。例えば高名な詩人の一人は三冊も購入し世に広めてくれた。その意味では高さんの試みが、日本の詩人、在日の詩人にとって自分たちが出来なかった、二十世紀の日本と米国と朝鮮半島の歴史を通して、朝鮮人被爆者の悲劇を浮き彫りにする、壮大な叙事詩を実現させたのだった。それゆえ多くの人々が注目してくれた。翌年の二〇〇七年の『原爆詩一八一人集』が、一八一人もの優れた参加者を呼び寄せることができたのも、その前年に『長詩 リトルボーイ』があつたことだったと私は考えている。その意味で高さんには心から感謝をしている。高さんは日韓の詩人の友情の象徴的な存在になったのだと私は考えている。その灯を絶やすことなく、高さんはもちろん、「詩評」の若き詩人達とも友好を深めていきたいと願っている。

2

今回の『アジア詩行——今朝は、ウラジオストクで』の特長は、アジアの民衆への交流の仕方を高さんが身を持って示してくれているところだ。高さんは本当に自由な感性で旅先のアジアの今ここを眺めている。全く先入観のない詩人の感性がそこで出合う人びとの現れてくるものと同時にその奥底の苦悩を垣間見てしまい、それを正確に記そうと試みられて

いる。この「アジア詩行」の試みは、いま固有名を持って生きているアジアの民衆の姿や現在のアジアの置かれている困難な状況を凝視し、それを詩に変換している。楽々とアジアの国境を越えていく独特の凝視の仕方が「アジア詩行」の芸術性をさらに豊かにしている。

高さんは初めて二〇〇六年八月四日に原爆ドームの前に立つた。その元安川の岸辺で咲いていた「油桃花」（夾竹桃）や宮島で見かけた「白いリボン」（おみくじ）について記した「木の枝のリボンと油桃花」から詩集は始まっている。きっと高さんは「油桃花」（夾竹桃）が原爆の熱風を浴びたらどのようになるのかを想像したのだろう。またおみくじの意味を剥奪させて「白いリボン」と喩えて、韓国では喪中に女性が白い布きれを髪につけることをダブらせている。高さんは夾竹桃と「白いリボン」の「このふたつがわたしには叙景の悲劇になろうとは」と語っている。高さんの「アジア詩行」は現在のアジアの「叙景の悲劇」を直視する試みであるとも言えるだろう。日本の広島・宮島から始まり、ロシアのサハリンでターリアの花を見つめ、中国吉林省延吉市の大便所のネズミに親近感を抱き、空想のエベレスト山に登り、モンゴルのバヤンゴビの草原で排泄する女たちの逞しさを眺め、モンゴルのウランバートルの太い砂浜のハマナスと少女を慈しむ。また沿海州で日本、ロシア、中国、韓国・朝鮮を感じながら「耳

になつかしい笑い声や話し声、そして町や通りの快い騒音」に耳を澄ますのだ。それらを含め、高さんがアジアを歩いて感じた手触りがそのまま詩に転化されていく不思議な体験をこの詩集から読み取れるだろう。多くの日本の詩人はもちろん、アジアに真に向き合うことを感じている人びとは、この詩集から多くのことを感じ取り、アジアに向き合うヒントになるだろう、と私は考えている。

それから、カバー表紙と大扉の写真は、詩人でカメラマンの柴田三吉氏が何度もアジアを旅行した時の写真の中から使用させて頂いた。柴田さんも写真と詩を通してアジアを凝視している詩人だ。二〇〇六年の広島での出版記念会にも参加してくれ、高さんとも二次会で親しく話されていたことを覚えていいる。この詩集も多くの日本人に愛される詩集になることを願っている。